やまと日本のかたち

第二部・第十六回

ビジネスに生かす「いけばな」

静けさに漂う緊張感

真の国際化とは自分の国を知ること。
“華道”は日本人の美意識、人生観そのものである。
基本を身につけ、実際にいけてみよう。

text by 渡辺幸裕 + photographs by 宮田昌彦

室町末期、京都の僧であった、池坊専応は風雪にさらされながらもたくましく生き、やがて枯れて散っていく草・木・花の姿に人生の真実を悟り、それを表現するいけばなを確立した。

いけばなは、色とりどりの花を華やかに飾るフラワーアレンジメントとは異なり、もともとは仏前に自らの等身大の思いを表す〝祈りの花〟を供える行為であったと言われる。そこに四季の花を取り入れ、季節の移ろいを楽しむ行為などが加わり、現在のいけばなとなった。

池坊専応が著した『専応口伝』にもあるように、壊れた花器や枯れた枝にも「花」がある。いけばなには、そんな日本人の美意識、自然を愛する気持ちが込められている。

池坊の次期家元、池坊由紀さんにお正月にふさわしい木瓜（ぼけ）、若松、薔薇を組み合わせていけていただいた。いけばなは、選択の連続であり、引き算の美学であると言う。そして、惜しげもなく花や茎が剪定され、シンプルな空間が作り上げられていく。ここには無駄なものがそぎ落とされた、潔い日本の美が感じ取れる。

二つとして同じ形の枝はない。同じ花を使ってもいける人が違えば、選択する枝も花も異なる。選んでは切り、捨てる。毎回、新しい局面の中で、新たな選択をし、経験を積んで新たな形を生み出していく。これはビジネスでも同じことが言えそうだ。

いけばなはコミュニケーションツールとしても役立つ。花という共通の話題を通して、様々なジャンルで働く、価値観の異なる人々が集まり、お互いの花を批評し合う。戦国時代の武将や文化人たちはこうした経験を通して、相手の考え方を知り、より深い人間関係を構築していった。そして、様々な人の価値観を学ぶことで自らの見識も深めた。時には、そこでの経験を仕事へもフィードバックしていたのかもしれない。

仕事上の会話では心と心が通じ合う人間関係はなかなか築きにくい。仕事以外にも相手と議論し合える話題を持つ、深みのあるビジネスパーソンとなる一つの手立てとして、いけばなに挑戦してみてはいかがだろうか。

基本を身につければ、国内だけでなく、海外へ出向いた際も、現地の花でいけられる。そうした作品を前に、花を通して、日本と西洋の美意識の違いを現地の人々と議論してみるのも一興かもしれない。

池坊次期家元・池坊由紀さんに正月の花をいけていただいた。草・木・花にはさみを入れる瞬間は緊張の連続である。張り詰めた緊張感の中で生み出されるいけばなのシンプルさは、まさに「数少なしは心深し」という日本の美意識を象徴している。

いけばなの表現方法

1〜3月をテーマにした池坊由紀さんの作品。いけばなと言っても様々な表現方法がある。

生花（しょうか）
もともと床の間に飾る花だったものが発展。大地に根をつけ、大きく成長し花咲く草木の姿を一瓶に表している。用いる花材は特殊な場合を除き、3種類までしか扱われない。複数の花材を用いても常に正面からは必ず1本に細くスッキリ見えるよう整えられている。

立花（りっか）
仏前に供えられる花「供花」が立花のもともとの形。昔から身近な自然の草木を手折って家に持ち帰り、日々の生活用品に挿して楽しむ、「挿花」様式と合わさって、立花へと発展した。自然の景観をそのまま部屋に取り込もうとした結果生まれたいけ方。池坊の代表的な様式。

自由花
一定の規則もなく、草木の性情や色、形を観察した上でいける人のセンスを自由に生かせる。洋花などを用いることも多い。

季節を表す和花

最近では花屋でなかなか見かけなくなった和花だが、いけばなを通して和花の季節感に触れてみてはいかがだろうか。

元日から3日まで	松、梅、水仙
7日正月	柳、翠松（みどりまつ）
15日正月	梅、椿
2月	柳、糸桜
3月	庭桜、梨花
4月	藤、牡丹、かきつばた
5月	竹、百合花、くちなしの花
6月	れんげ、あし、撫子（なでしこ）
7月	ききょう、萩、蓮
8月	野菊、菊、八朔
9月	もみじ、すすき
10月	南天、冬椿
11月	寒菊、水仙
12月	早梅（そうばい）、川柳、びわ

いけばなの歴史

日本は四季が移ろう、豊かな自然に囲まれた島国である。そんな環境の中で樹木や岩など、自然の中には神が宿るという自然崇拝が信仰されてきた。
やがて中国から伝来した仏教と合わさり、仏前に花を供える儀式となった。室町時代には、日本の伝統的な建築様式である「書院造」の床の間を飾る花としてもてはやされ、その頃流行した茶道とともに日本の伝統的な芸術の一つとして発展してきた。
江戸時代には池坊のいけばな様式である立花が全国へ普及し、町人文化としても多くの関心を集めた。
文明開化に併う生活の洋風化で新しい流派を起こす人々が輩出され、時代に適応した新しい様式のいけばなが次々と研究し続けられている。

Yukihiro Watanabe

ビジネス・コーディネーター。1950年生まれ。前職のサントリー宣伝部で、海外イベントを担当した時、自国文化についての知識のなさを痛感。2001年独立を機に日本文化超初心者の会"和・倶楽部"を提唱、運営中。会のコンセプトは「日本人に生まれたことを喜びたい」。　写真：新関雅士

池坊
IKENOBO

お話を伺った人

池坊由紀さん
華道家元池坊・次期家元

池坊ホームページ
http://www.ikenobo.jp
HPでは、教室の場所、レッスンの時間帯、月謝などが検索でき、先生の性別や教室の雰囲気、個人レッスンの有無などの詳細も確認できる。自分に合ったいけばな教室を検索してみてはいかがだろうか。

参考文献　『はじめての池坊いけばな入門』池坊専永・監修、日本華道社・編／講談社